

子規全集

第五卷

俳論俳話二



N. D. C. 910 672 p 20 cm

子規全集 第五卷

俳論俳話 二

定價 參千六百圓

昭和五十一年五月十八日 第一刷發行

著者 正岡子

編集表 正岡忠二郎

發行者 野間省一

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽二一二一二

電話 東京(〇三)九四五一一一一(大代表)

郵便番號 一二二 振替 東京三九三〇

印刷所 株式會社 精興社

製本所 大製株式會社

本文用紙 三菱製紙株式會社

©正岡忠三郎 一九七六年

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

俳論俳話
二

目次

明治三十年の俳句界	九
「ほととぎす」の一周年に際して	五
蕪村忌	七
曝背閒話	二〇
「新俳句」のはじめに題す	三
ト筈十句集を評す	六
或問	四
俳人の手蹟	六
第十七號募集句に就きて	三
「べく」	四
雜感	七

ほとゝぎす發行處を東京へ遷す事	七
立待月	七
俳句分類(乙號)	八
朝顔句合	九
古池の句の辯	四
俳諧無門關	三
蕪村と几董	三
俳諧かるた	四
明治卅一年の俳句界	五
俳句新派の傾向	五
俳句の初歩	七
募集俳句「凍」に就きて	七
梅	九
「中興俳諧五傑集」敍	九
俳人太祇	三

幻住庵の事	二六
募集句「手」に就きて	三四
募集句「木の芽」に就きて	三〇
俳句と聲	二三
隨問隨答	二五
募集句「妻」に就きて	三三
俳句評釋を讀む	三六
檐の雫	四三
朝顔句評	四八
發兌保等登藝須第三卷第一號祝詞	五一
雅號に就きて	五三
蕪村句集講義に就きて	六三
柚味噌の事	六六
車百合に就きて	六八
俳諧三佳書序	七四

明治卅二年の俳句界	三六
糞の句	三九二
奇想變調錄	四〇七
一句二題	四一
俳句上の京と江戸	四二
召波樗良句集序	四六
ホトトギス第四卷第一號のはじめに	四三
俳話 病牀問答 病牀俳話	四四〇
俳諧新舊派の異同	四四七
「春夏秋冬」序	四五五
瀬祭書屋俳句帖抄上巻を出版するに就きて	
思ひつきたる所をいふ	四五七
發句ハ丁寧ニ取扱フベシ	四七三
〔句合評 俳句稿評 俳句選評 評答句〕	
二日相撲	四七五

四季句合五十番 四七九

〔夏目漱石俳句稿評〕 四九〇

俳三年 〔佐藤紅綠俳句稿評〕 五〇七

旅中駄句 〔勝田主計俳句稿評〕 五五〇

〔野間叟柳俳句稿評〕 五五五

〔櫻田大我俳句稿評〕 五七二

手まぐらの巻 五七三

秋期五題句集 五七五

夢の浮橋 五八三

參考資料 五九七

解題 尾形 侑 六一七

解説 篠田 一士 六五九

編注

本卷は本全集第四卷「俳論俳話 一」のあとを承けて明治三十一年から没年（明治三十五年）までの俳論俳話を年代順に収録し、併せて、子規俳句論の實踐である句合評、俳句稿評、俳句選評の類を収めた。底本は主として初出の謄紙および單行本であるが、俳論俳話のうち一部自筆稿の現存するものはそれに據った。なお、選句評類の収録は全集として初めての試みで、そのほとんどは自筆に據った。

明治三十年の俳句界

(上)

明治三十年の俳句界は明治二十九年の俳句界に比して幾多の進歩を爲したるを見る。進歩に二あり。一は初學の俳人が漸く上達するをいふ。一は既に上達したる俳人が古人の進まざりし區域に迄進むをいふ。前者は望を未來に屬せしむるに過ぎず。眞成の價値は後者にあること論を^{*}俟たず。而して之を代表する者を碧梧桐とす。碧梧桐は意匠の奇拔を以て勝りし者、昨年來却て平易なる（しかも陳腐ならざる）方に趣けり。句調は一昨年^{*}の末より喜んで長短句を爲し亂調に流れし者今は却て普通なる五七五調に返れり。五七五調に返りしは固より進歩に非ざるも、其意匠の全く古俳句と趣を異にしたる處とそれに伴ひたる句法の變化とは古人が未だ曾て知らざりし未開の地を開きたる者にして、其價値は容易に之を評定するを得ざれども、少くとも彼が一機軸を出だしたる功は俳句史上に特筆すべき者に屬す。

余は之を説明するためには直ちに實例に就きて解剖するの解得し易きを信ずるを以て此法に據り^よ

て數句を説明すべし。

夜に入りて蕃椒羹る臺處 碧梧桐

此句に些の理窟無き處、殆んど工夫的痕迹を留めざる處（工夫を凝らしたる句なるべけれどそは痕迹を留めざるやうに工夫せし者にて、十分成功するを得たり）意匠は日常の鎖事ながら毫も陳腐ならざる處、句法亦平易にして切字あるが如く無きが如く、しかも能く切る處、劇烈に感情を鼓動する者ならずして、淡泊水の如き趣味を寓する處此數箇條は此句が極端に新體を現したる所以なり。若し從來の俳風に拘泥する人をして見せしめば沒趣味の句と爲し了らん。此等の入此句の趣味を説明せよといはゞ、余は答へていはん、虚心平氣此句を翫味せよ、全く自己の量見を拋却し、身を此句中に置きて此句の中より新趣味を探り出だす可しと。蓋し趣味は感ずべく、説くべからず。然れども稍烈しく感情を刺激すべき者はヒント的に之を説明し得べく、又聽く者も此不完全なる説明の中より妙處に悟入すること無しとせず。只此句の如き淡泊なる者に至りては不完全なる説明をすら爲すこと能はず。強ひて言はんと欲するも一點の厭味無しと評する位より外に何等の説明をも與へんに由無きなり。

水汲の男來て居る朝寒み 碧梧桐

此句の眼目は「居る」の二字にあり。此二字無くんば平凡見るべきなし。

客を率て夜半に歸るや月の門 碧梧桐

複雑なる意匠、新奇なる意匠は句法をして佶屈ならしめ易し。此句の意匠且つ複雑に且つ新奇に

して、句法平易、大道を行くが如し。是れ亦新體の特色の一なり。

隠々として秋の山鳴ることを知る 碧梧桐

滯陣や久しうなりて秋の雨 同

此頃や末枯の芝刈る遅し 同

水に落ちて泳ぎかしこき蟲かな 同

尙生きて生くさきものに秋の蠅 同

鹿に與ふ煎餅を買ふ旅心 同

蜻蛉や世話しい中へ臺所 同

古里の先生の軸や梅もどき 同

此等の句を見て余が謂ふ所の新體なる者を求めなば解する人は必ず解すべし。

此新體と從來の俳句とを比するは猶油畫の新派（紫派）と油畫の舊派とを比するが如し。一は簡單（畫題小なり）一は複雑（畫題大なり）一は平易、一は屈曲。一は淡泊、一は濃厚。一は輕新、一は沈著。一は些細なる者の極めて微なる感じを現すに適し、一は壯大なる者の最も深き趣味を寫すに宜し。いづれにも一長一短は免れ難し。兩者並立して相互の短を補ふは文學を大成し美術を大成する所以には非ざるか。

碧梧桐と最も善く似たるを虛子とす。別に句を擧げざるべし。

(下)

碧梧桐、虛子、紅綠、露月、把栗、肋骨、四方太、秋竹、蒼苔、漱石、霽月、極堂、繞石等は俳人の錚々たる者なり。此外地方に在りて昨年中に歩を進めたる者を茶村、菰堂子、青嵐、綠、瀾水、森々、香墨、桂堂等とす。鳴雪俳壇を退き墨水亦多くは俗事に礙きまつたげらる。

俳諧界の雜誌は「ほととぎす」伊豫に起り「秋の聲」東京に倒る。

俳書は蕪村句集の外に「與謝蕪村」「新派俳家句集」出づ。博文館より「俳諧文庫」を出だす。

一昨年の末より昨年に於て俳句會續々として地方に起る、雨後の筍の如し。地方俳句會の最も古き者を松山の松風會とす。起源數年前に在り。京阪の滿月會は一昨年の秋を以て始まる。是より後、仙臺の百文會、金澤の北聲會、松本の松聲會、松江の碧雲會、駿遠の芙蓉會、越中の越友會等相續いで起る。其の他京都には猶なほ幾多の團結あり各地方亦小團結を作る者多し。昨年の上半に在りては松風會、百文會、北聲會等威を一方に振ひし者漸次に衰へ、下半に在りては滿月會獨り其隆盛なるを見る。然れども一盛一衰は種々の原因に出づる者にして必ずしも其地方の俳句の退歩を示す證據とは爲し難し。

昨余年は同一の俳句を取りて各地の俳人に示し之に優劣を附せしむ。地方俳人の評する所十中八九迄は相同じく東都俳人の評する所一々其結果を異にす。而して地方の俳人は各地に散在する者に於て敢て氣脉を通ずるに非ず、東都の俳人は屢しばしば一堂の中に會して議論を上下し居る者なり。蓋し東

京の俳人は研鑽、琢磨のために各自の見識を生じ、各其見る所に向つて一直線に進行するを以て一方に僻し且つ其方にのみ發達するの傾向あり。地方の人は一はプリミチヴなると一は小學校の先生の如くコムモン、センス的に發達し居るとの二原因に因りて相同じき者ならん。此評に於て衆人に推されたる句は意匠上極端の事物を現したるものにして衆人に斥けられたる句は句法上不具的にしまりたる者（譬へば或る包を綱にて強く縛りたるため包みに凹凸を生じたらんが如し）なり。東都俳人中最も衆評に近き者を鳴雪とし遠き者を碧梧桐とす。衆の推したる句は即ち碧梧桐の斥けたる句なり。衆の斥けたる句は即ち碧梧桐の推したる句なり。是れ地方俳人は句法上の觀察精細ならずして、徒に極端の趣向に眩耀せられ碧梧桐は句法の緊弛を吟味すること詳密にして、其弊として句法しまりあれば無理なる趣向をも寛恕するがためなり。兎に角句法に心を留めざるは地方俳人の一失なるべし。若し夫れ昨年の地方俳人を以て一昨年の地方俳人に比せば其進歩の著き同日に論ずべからず。

「明治二十九年の俳諧」に於て余が新派と稱へし者即ち碧梧桐虛子により唱道せられし俳句は其意匠の上に於て殆んど全國の俳壇の一半を占むるに至れり。只音調（字數）の上に於ては寧ろ保守派に降りたるが如し。地方俳人時に長短句を爲す者あり。

彼の俗宗匠派なる者との關係に至りては之を論ずるの必要無し。彼等は作る人を異にし、作る物を異にし、作る目的を異にす。近日俳句の流行につれて各地新聞往々宗匠派の俳句を載す。俗氣満紙、陳篇相倚る。しかも新聞記者先生玉石を區別する能はず、燕石を襲藏して珍となす。殊に笑ふ

べし。只新聞、俳句を載する者其數を増したるは昨年中の一現象なり。

〔日本 明治31・1・4 三〕

〔編注 日本發表時の題名は「明治三十年の俳句」であるが、他年度の同主旨論文がすべて「○○年の俳句界」とあること、單行本『俳句界四年間』（東京・俳書堂 大阪・金尾文淵堂書房 明治35・4・20刊）に「明治三十年の俳句界」として收録されていることを考慮して「界」の字を補った。〕